

体験レポート

竹内涼子

出演者になる

33年間勤めた出版社を辞め自由になっていたところ、昨年の港区のリーディングワーク ショップに引き続き、再び上田久美子さんの参加型プロジェクトがあるという。しかも今回は「バクテリアになれる」らしいということでさっそく応募した。図書館で調べ物をしたり、観劇前にパンを食べたり、わりと馴染みのあった日比谷公園。

そこでバクテリアに? なせ? どうやって?—様々な疑問を抱きつつ、朝早く指定された集合場所へ。

5月とはいえ日射しはかなり強い。熱中症予防の白湯を飲み、配られたミニラジオを手首に装着。公園内のつつじ山に移動し、いよいよ「何か」が始まる。全身白のニットを身に着けた川村さんに導かれ、葉っぱになって体をほくす。続いて呼吸のレッスン。指先から吸って足先から吐いたり、おでこから吸ってお尻から吐いたりして、人間ではない生き物になってみる。暑さに弱い私は日光が苦手な嫌光性のバクテリアだ。

「気持ちいい風に流されてえ〜、池の近くに来てみましょう〜」川村さんのほんわかした声が耳に心地よい。

最初は気になった道行く人の目も、自分の呼吸に集中しているうちにまったく気にならなくなった。池のほとりでは水中生物と交信し、光や草をパクパク食べながら小川(曲がりくねった道)を流されてゆくと、突然巨大なミッドタウン日比谷が現れる。

「ジャジャー! あれがオフィーリア! みんなはあれがオフィーリアに見えるくらい小さな生き物になっちゃってるよ!」

川村さんの声に、一同眩しそうにミッドタウンを見上げる。

ドクタミの匂いに追い立てられ、アスファルトを駆け抜けたところで二度目の水分補給。だいふ汗をかいた。そこで川村さんからこれからの説明を受ける。

「今から本番をやっていきたいと思います」(えっ、本番?)「あのミッドタウンが私、オフィーリアです。オフィーリアが川で溺れる場面を皆さんには小さな生き物になって演じていただきます」(マジか...)「そして、あそこがステージです」

指さされた先は三笠山。頂上にはいつの間にか観客が集まっている。

言われるがまま山の斜面に移動し、バクテリアの呼吸を続けていると、頂上からふらふらと川村さんがやってくる。足を滑らせスローモーションで川に落ちてくるオフィーリア。

—テカい!! 巨大な波に翻弄され、ある者はバサバサと動くまつげに巻き込まれ、ある者はもがき苦しむオフィーリアの口に吸い込まれる。やがて息絶え、動かなくなるオフィーリア。その体からは芳香が立ちのぼり、私たちは腐りゆくオフィーリアの身体を食べる、食べる、食い尽くす.....すっかり満腹になり体を伸ばすと、山の斜面を風が吹き抜けた。

ああ、なんて気持ちいいんだろう! オフィーリアは消滅し、小さな生き物たちは方々へ散ってゆく。そして静寂。

「はい、みなさん舞台へお戻りください」普通サイズに戻った川村さんに促され、出演者たちが一列に並ぶ。一礼すると三笠山の頂上から拍手が降ってきた。なんだか急に恥ずかしい.....ちょっとバクテリアになってみようと参加した自分は、いつの間にか舞台に立ち、拍手をもらう役者になっていた。

観客になる

別の日には観客として参加した。スマホに流れるストリーミングを聴きながら、こっそり小さな生き物たちの後を追う。外国人観光客、デモ参加者、昼休みのサラリーマン——日比谷公園には様々な人が集う。ゆらゆら揺れたり、回転しながら公園を移動してゆく一群を、一瞬不思議そうに眺めはしてもさほど深く気に留める人はいない。ほうほうの草叢のヘンチですでに草木と一体化しているような女性もいて、わりと公園に集う人々は、無意識のうちに自然との交流の扉を開いているのかもしれない。日頃から楽器やダンスの練習をする人もいて、多少のことでは驚かないのかもしれない。これが都会の公園というものか、と妙に感心したりもした。

スマホにはゆるい感じのラジオ番組が流れてくる。やがて『ハムレット』のオフィーリア溺死の場面が、現代音楽みたいな響きとともに繰り返し流れる。それを聴きながら、遠巻きに池を眺めると——なんと!川村さんが狂って水辺を彷徨うオフィーリアにしか見えないではないか!私がバクテリアだった時には草木と自由に戯れ、私たちとあんなに楽しく交信していた川村さんだったのに.....そこにいるのは、はかなく哀しい狂った女。笑いながらアスファルトを駆け抜けた川村さんと小さな生き物たちも、今は哀しい狂者の行進。

リフレインする電子音を聴きながら眺めると、ミッドタウン日比谷の巨大なビルもなにやらアーティスティックに感じられてくる。耳からの情報によって、こんなに景色が違って見えるとは.....。

そして最後の三笠山。頂上は思ったより高い。恐々見下ろす私のすぐ横を、狂ったオフィーリアがすり抜け、斜面をゆっくり落ちてゆく。小さな生き物たちが、遠くに飛ばされたり、回転したかと思うと、動かなくなったオフィーリアの周りに群がり彼女を食べはじめる。最愛の人の言葉に傷つき小川に落ちて死んだ女の、これはもう一つの悲劇だ。やがてオフィーリアが消え、生き物たちは去り、舞台には誰もいなくなる。

しはしの静寂の後、川村さんに誘われて出演者たちが一列に並んだ。一人ひとりの顔を見たのはこの時が最初かもしれない。なんか感動しちゃったな.....のん気に公園をめぐる散歩者だった自分は、いつの間にか舞台を見つめ、拍手を送る観客となっていた。

全体を通じて

当初は本番1回の出演のはずだったが、リハーサル参加者の募集に応募した結果、出演者としては計3回参加することになった。

回を重ねるごとに、川村さんのナビゲーションや『ハムレット』上演の流れがどんどん変わっていく様子を知れてとても面白かった。呼吸もより自由に操れるようになり、周りのバクテリアとの繋がりも感じられて、人知れず秘密の交信をしているような気持ちになった。私は虫が大の苦手なのだが、バクテリアになっている間は全然平気で、草叢の虫にはむしろ寄っていきたい気がしたのは驚きだった。

本番終了後、参加者数人でご飯を食べながら今回の体験について話をしたのも楽しかった。初めて会ったのに、何時間でも話をする事ができる。受け取った出演料2000円はこうするためのお金だったのか!とこれもとてもよかった。

演出の上田さんは、リハーサル中だけでなく本番の後ですら「フィードバックをください」と言い続けていた。よりよいパフォーマンスを求める姿に感銘を受けつつ、その貪欲さに圧倒された。やはりなんらかのモンスターな気がした。

体験後、「日比谷公園でバクテリアになった」という話をすると、さほど驚かない人と、「えー」と引く二つの反応があった。驚かない人は日頃舞台を観る人たちで、引く人は舞台を観ない人たちだったりして、この境界線には何か意味があるかもしれないしないかもしれない。

昨年会社を辞めて、「今度は人間も辞めていいのか!」などと思いつつ参加したプロジェクトだったが、想像を超えて自由になることができた。演劇というのは客席から観るだけのものではなく、とても立体的で継続的な体験だということを実感し、とにかく楽しかった。まさに Work in Progress。

全てを終えて帰る時、すっかり日焼けした上田さん、川村さん、miuさんやスタッフの人たちの姿に少しだけ寂しさを感じた。